

文化・芸術批評家としてのポウル・ヘニングスン
—*Klingen* および *Kritisk Revy* での文筆活動からみる
デンマークモダニズムの幕開けと発展—

デンマーク語専攻 藤原希

目次

1. はじめに
 - 1.1. 研究目的
 - 1.2. 論文要旨
 2. 文化・芸術批評家ポウル・ヘニングスンと当時の時代背景
 - 2.1. 作家略歴
 - 2.2. 当時の時代背景：戦間期のデンマーク
 3. *Klingen* および *Kritisk Revy* におけるヘニングスンの批評文分析と考察
 - 3.1. *Klingen*
 - 3.1.1. 概要説明
 - 3.1.2. 批評文分析と考察
 - 3.2. *Kritisk Revy*
 - 3.2.1. 概要説明
 - 3.2.2. 批評文分析と考察
 4. ヘニングスンの文筆活動からみるデンマークモダニズム
 - 4.1. デンマークモダニズムの幕開け
 - 4.2. ヘニングスンの文化・芸術概念変遷
 - 4.3. デンマークモダニズムの発展と *Klingen*, *Kritisk Revy* への回帰
 5. おわりに
- 使用テキスト
参考文献
参考辞書・辞典
インターネット上の資料

要約

ポウル・ヘニングスン(Poul Henningsen, 1894-1967) は 20 世紀デンマークにおいて活躍したデザイナーおよび建築家である。その代表的な作品に照明器具の PH ランプシリーズがあり、デンマークデザインを代表する傑作の一つである。日本においても一般にデザイナーとして彼の名が知られている一方、未だ広く認知されていない一面として、芸術家としての枠を越え、政治から文化まで多岐に亘り批評する文筆家としても積極的に活動していたということがある。彼による批評の焦点はとりわけ文化・芸術観に当てられ、モダニズムの動きが他の主要ヨーロッパ諸国とはやや遅れ、デンマークで高まりを見せ始めた戦間期に国内の芸術家集団が中心となり発行した文芸誌 *Klingen* (『刃』, 1917-1920) でのデビューを皮切りに、「文化・芸術批評家」として本格的な文筆活動を開始した。*Klingen* に引き継ぐ形で自身が創刊した *Kritisk Revy* (『批判的レビュー』, 1926- 1928) では、他の芸術家たちと議論を交わしながら数多くの論説や時事批評を執筆すると同時に、国内における新たな芸術様式を模索し、自身の文化・芸術観も次第に確立していき、デンマークモダニズムの発展において重要な存在となった。

したがって、本稿ではとりわけ「文化・芸術批評家」としてのヘニングスンが戦間期に発行されヘニングスンが文筆活動のスタートを切る場となった二つの文芸誌 *Klingen* および *Kritisk Revy* に関与していったのかに焦点を当て、その批評分析を通して、一般に認知されているデザイナーとしてのヘニングスンとは異なる一面を明らかにすることを主たる目的とした。さらに彼が他の芸術家たちとともに牽引したデンマークモダニズムのその幕開けから発展までを大局的に追うことで、今日のデンマークにおける文化および芸術をより深く理解することを試みた。

各章の概要としてはまず第二章でヘニングスンの経歴および二誌が発行された戦間期という時代背景を明らかにした。

第三章では *Klingen*, *Kritisk Revy* それぞれの概要説明に始まり実際の批評文を引用しながらテキスト分析および考察を行った。ヘニングスンの代表作である PH ランプがそれを知る上で最適の例となるが、他の多くの芸術家たちが従った直感的アプローチではなく、常に科学的そして哲学的根拠に従って物事を捉え、自身の文化・芸術観と突き合わせた上で実践に移す人物であった。そしてその姿勢は今回分析対象とした両文芸誌における批評文からも

十分に読み取ることができた。ヘニングセンは両文芸誌において、当時の芸術家教育を批判し、ル・コルビュジエやバウハウスといった当時のヨーロッパでもてはやされていたモダニズムの動きに警鐘を鳴らし、真の価値を持つ芸術とは何か、自国デンマークに適したモダニズムの形とはどういったものかということについてストレートに自身の意見や見解を述べ、時にはシニカルな言い回しで思想や個人を非難した。とりわけ自国デンマークの国内状況や歴史を特異なものとみなし、その地域性や風土、人びとの日常生活に適した芸術様式の必要性を説き、彼が唱えたこの芸術理論は「デンマーク例外主義」と呼ばれた。他にもレビューや映画の制作にいたるまで、マルチな才能をもったヘニングスンはさまざまな分野で精力的に活動し、保守勢力に対抗し既成の文化・芸術のあり方の革新、国内外の政治的脅威や反文化的脅威への対抗に奔走し、20世紀におけるデンマーク文化・芸術を語る上で外すことのできない人物となった。最期まで自身を機能主義者であることは認めなかったものの、デンマーク例外主義的観点から派生し、デンマークモダニズムの軸を担った芸術理論「有機的機能主義」の確立に多大な影響を与えたことは忘れてはならない。

つづく第四章では、第三章で見られた両誌におけるデンマークモダニズムの先駆け的要素を整理しながら、その幕開けから発展までを両誌刊行後の彼の文化・芸術観の変遷と交えながら紐解いていった。デンマークにおけるモダニズム運動の幕開けは他の主要ヨーロッパ諸国とは約十年程度遅れをとっていたものの、とりわけ家具デザインの分野において1950年代に国際的な成功を収めた。一方でその後徐々にスノビズムの方向へ走り始めていた当時の傾向に対しヘニングスンは警鐘を鳴らし、自身が *Klingen* および *Kritisk Revy* で主張し続けた本来の文化・芸術のあり方へ立ち返る必要性を訴えた。

本稿は *Klingen* よりも *Kritisk Revy* の批評分析に主な重点を置いたが、すでに述べたとおり後者は前者を引き継ぐ形で創刊された文芸誌であり、仮にどちらか片方が欠けるようなことがあれば、デンマークモダニズムひいては近現代デンマークにおける文化・芸術の様相は異なるものになっていたと言っても過言ではない。したがって両文芸誌で決定的な役割を果たしたヘニングスンによる文筆活動の有意性は計り知れないものであると言え、彼がデンマークモダニズムの発展に大きく貢献した重要な人物であったことがわかった。

